ヒューマン

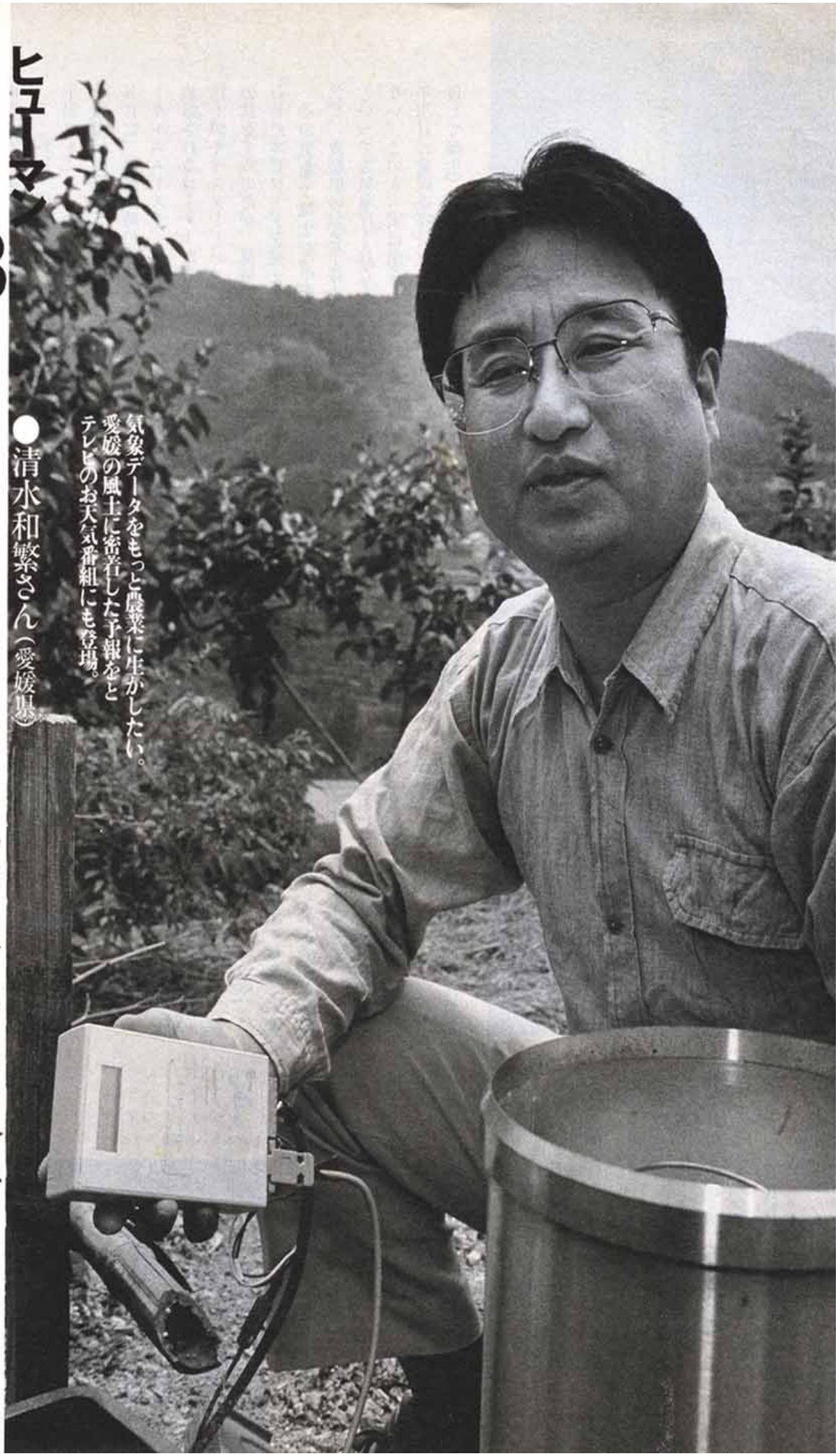
'98

JAマンの気象予報士

取材／岩田重敏　撮影／家の光写真部・甘利眞一

●清水和繁さん（愛媛県）

気象データをもっと農業に生かしたい。
愛媛の風土に密着した予報をと
テレビのお天気番組にも登場。



天気予報が変わった。各テレビ局とも個性的な気象予報士をそろえて、楽しめる天気予報を作っている。

ここ四国・愛媛県のテレビの天気予報にも、ちょっとユニークな気象予報士が出演している。それもNHKにだ。午後六時の松山放送局のローカルニュースで、毎週金曜日だけ放送されるコーナーがある。気象予報士がキャスターといっしょに天気の話をするのだが、地域の風土に合わせたエピソードを交えて興味深い。

その気象予報士が清水和繁さん(44)。愛媛県の気象予報士第一号だ。といっても気象庁とはなんの関係もない。この人、実は県農えひめ(今年四月に愛媛県経済連と青果連が合併して誕生)の園芸課で、野菜の種子に関する仕事に携わっている。

金曜日だけは早退させてもらい、五時にNHKに入る。ニュースが始まるのが六時だが、清水さんの出番は六時四十分ころだ。それまでは画面に入る図や文字のフリップなどの準備。直前にスタジオに入り、キャスターとのかけあいというかたちで天気の話をする。

「気象メモ」のコーナーでは天気にまつわることわざや言い伝えなども取り上げる。この日は『日照りの朝曇り』(朝曇っていると日中はかならず暑くなる)という言い伝えの正しさを科学的に解説した。

スタートして三年。愛媛県では知る人ぞ知る存在だ。とくに農家の間で好評だという。清水さんが農業関係者なので農業と天気の関係についての話をすることが多いからだろう。

超難関試験を突破して

清水さんは八幡浜(やわたはま)市日土町のミカン農家に生まれる。近畿大学農学部を卒業後、昭和五十一年に愛媛県経済連に入った。

気象に興味をもつようになったのは平成二年ころから。「土壌調査をしていたとき、県の農業試験場長だった渡辺全(たもつ)さんに会ったんです。渡辺さんは天気に詳しくて、手帳にはアメダスのデータがびっしり。この人から天気の話をいろいろ教えてもらったのがきっかけですね」

ある日のこと。土壌調査のため畑で穴を掘っていたとき、ふと空を見上げた。

「そのときハッと気がついたんです。いままでは下を見て穴ばっかり掘ってきた。でも、だいじなのは土だけじゃない。太陽の光や風もだいじなんじゃないかって。一種の悟りですかね。ちょうどそのころ、いまJA内子(うちこ)町に勤めている友人の森本君から気象予報士の試験のことを聞いて、受けてみる気になったんです」

この試験が難しいのは周知の事実。合格率は一割程度で、あのテレビの天気予報でおなじみの森田正光さんですら最初は不合格になったという超難関試験だ。

清水さんはこの試験に三度めの挑戦で合格。愛媛県で初の合格者だった。このとき、県内のマスコミが取材にきた。NHKのニュースにも出

インターネットで「ひまわり」の画像を見る

NHKのスタッフルームでフリップのできを確かめる

「前日までに気象のおもしろい話題をつくるのはたいへんなんですよ」と清水さん

た。これが縁でNHK松山放送局から声がかかり、金曜日の天気予報を担当することに。

「最初は緊張の連続で評判が悪かったんです。でも、途中で担当のプロデューサーから好きなようにやってみたらとアドバイスされて、それから開き直ったんです。ぼくは農業者なんだし、家も農家だ。ミカンや稲と天気の関係の話をすると、これがおもしろいって好評で、なんとか続けられることになりました」

地元の人が地元の天気を語る

父親の喜久美さんから聞いた話をもとにしたという「気象メモ」のコーナーも好評だ。これまで取り上げたのが約百本。『皿ヶ峰に雲がかかると雨が降る』（愛媛県の石鎚山の皿ヶ峰に雲がかかったら、すぐ雨になるという意味）、『大洲の朝霧は天気』（大洲市一帯に霧が出ると天気になるという意味）などなど。

ほとんどがその土地に古くから伝わるものだが、どれも科学的に証明されるという。そういう話が、農家の人には好評だという。

「この土地の風土にこだわっていきたい。それがぼくのバックボーンですね」

と清水さん。

東京で気象予報士の試験を受けたとき、当然、都会の人も受けていた。

「そのとき思ったんですよ。こんな人たちが愛媛の天気のことを語れるのかなあって……。やっぱり地元の天気は地元の人間が語らないといけないんじゃないかという気がしたんですよ。いまでもそう思ってますね。天気というのはその地域独特のものがありますからねと思いますよ」

JA西宇和の稲田さんと山頂の気象ロボットをチェック。土中15センチまでの水分を測定し、灌水するかどうかを決める

愛媛県は今年、雨不足。ミカン農家も心配だ。「雨はいつ来るんかなあ？」と清水さんに尋ねる

情報をミカン農家に提供

金曜日、清水さんはNHKの放送を終えると、松山から車で二時間ほどの実家へ帰る。ここには気象計測器やパソコンがあるので、ゆっくり気象の仕事ができるのだ。

「それに、母が病気で寝たきりなので、せめて週末だけは父といっしょに介護したいんですよ」

清水さんが実家に戻るのは、もうひとつ理由がある。地元の気象仲間の稲田さんたちと会うためだ。

清水さんがJA西宇和・電算課長の稲田範男さんと知り合ったのは十三年前。パソコン仲間だったのが縁で、以来親しいつきあいをしている。

稲田さんは、気象ロボットを設置するため尽力してきた。現在、管内には二十基の気象ロボットが設置され、つねに気象情報を流している。

「この気象ロボットは雨量、気温、湿度のほか、土壌水分が自動的に測れるもので、ミカン農家にとっては貴重な情報なんです。この情報はパソコン気象ネットワークを通じて生産者に提供しています」

と稲田さん。

「橘ネット」と称するこのネットワークがスタートしたのは平成八年。

現在、二百人のメンバーがいてパソコンで情報を交換している。定期的に会合も開いている。

「十日に一度、自分のミカンを持ってJAに集まり、糖度や酸度などを測って情報交換するんです。わたしは、これで人のつながりができればいいなと思っているんですよ」

と稲田さんは話す。

土曜日の午後七時。八幡浜市内のJAに集まったのは十一人のメンバー。この日は特別に清水さんが気象の話をレクチャーした。天気図の見方から始まって、雨と糖度の関係、台風の情報など、ミカン農家には貴重な情報をユーモアを交えて話し、集まったメンバーも身を乗り出して清水さんの話に聞き入る。

「地元の農家の役にたてばと、ときどきやっているんです」

と清水さん。

台風が来そうになると清水さんは忙しくなる。農業関係の知人が台風情報を教えてくれと言ってくるのだ。そのたびに、気象庁から送られてくる天気図を分析、インターネットで「ひまわり」の画像を見て台風の進路予想、台風情報を教えている。

「近所の農家の人から『テレビ見てますよ』と声をかけられると、やめられなくなりますね」

実家では3ヘクタールで温州ミカン、伊予柑などを作っている。お父さんと実のなりぐあいを調べる

持ち寄ったミカンの糖度や酸度を測定するパソコン気象ネットワークのメンバー。「ミカンと天気は密接な関係があるんです」

あなたは
自分の心臓に
自信がもてますか。

軽い運動やちょっとした緊張・ストレスで起こる息切れやどうきは、心臓からの警告サイン。救心を身近に備え、早めに服用してください。

〈救心〉は、八種の動植物生薬を配合し煉成したお薬。心臓の働きをよくし、血液循環や呼吸機能を高めます。どうきや息切れを改善することはもちろん、意識がボーッとしたときの気つけにもすぐれた効きめを発揮します。

どうき・息切れ・気つけ
生薬強心剤
救心

包装:16粒・30粒・60粒・120粒・300粒・600粒
お求めの際は〈救心〉とご指名ください。
救心製薬株式会社
〒166-8533 東京都杉並区和田1-21-7

〔資料・試供品(形状見本)贈呈〕
①試供品名②雑誌名③〒住所④氏名⑤年齢を明記の上、弊社広報課まで。